

4. 富里市の「選ばれるまちづくり」の提案

富里市のまちづくりの可能性については前項で述べたが、本項では、成田空港と新アクセスを関連付けながら本市の地域的な特性や条件を最大限生かした「人、そして企業から選ばれるまち」づくりについて、一つのイメージを提案するものである。

本市の特性をキーワードとして挙げると、「緑多く、自然豊か」、「東京から50～60Km圏内」、「成田空港と至近距離」などがある。しかしながら、このキーワードは本市の周辺自治体でも同様に、本市の優位性を確保するまでには至らない。そこで、さらに細かい部分に目を転じると、本市には「東京と成田空港の間に位置し、富里インターチェンジと至近距離に酒々井インターチェンジがあり、首都圏や成田空港へのアクセスが容易である」ことや、「成田空港就業者が成田市に多い」ことなどが挙げられ、前者のキーワードと後者の二つの要素を念頭に検討する。

本市はまちの将来像として「人と緑が調和し 未来を拓く臨空都市 とみさと」と掲げ、成田空港をまちづくりの一軸として進めており、本項では「エアポート・ビジネスタウン」、「エアポート・マイタウン」、「エアポート・ツーリストタウン」と設定して、「人、そして企業から選ばれるまち」について考えてみた。

(1) 「エアポート・ビジネスタウン」として

「企業に選ばれるまち」であるためには、用地や道路などのハード的条件はもとより、雇用の確保などのほかさまざまな要素が含まれる。道路については、平成25年4月の酒々井インターチェンジの供用開始により、本市にとって「もう一つの玄関」が誕生した。これにより、富里インターチェンジ周辺道路の交通渋滞の解消も期待できる。さらに、富里市街地から酒々井インターチェンジへ直結する市道01-008号線が開通することにより、成田空港南部地域とのアクセスも一段と向上する。

また、今後は成田空港と羽田空港とが一体的な運用に進むと考えられることから、羽田空港をはじめ都心や成田空港へのアクセスに対する空港関連企業のニーズも増加すると予測される。したがって、都心に向けたアクセスについては東京駅への高速バスの増便や、羽田空港を含めた新たなルートの研究など公共交通の充実は不可欠な要素となる。さらに、成田空港への公共交通の確保は、成田空港に関連する施設や企業進出の重要な課題の一つであるといえる。

以上のことから、本市には広い面積を必要とする企業の受け皿となる用地が乏しいこと、土地利用をする上での制約も多くなっている状況が垣間見られるものの、現在の土地利用の中で立地可能な業種の企業立地を誘導するとともに、将来的には成田空港周辺地域としての土地利用計画を検討することも必要である。また、一方では市内の空き店舗の状況を把握し、立地可能な業種とのマッチングなどを進める仕組みを作り、商業地域の活性化を図るのも有効と考える。

(2) 「エアポート・マイタウン」として

本市は、現在、成田空港への公共交通がない状況にもかかわらず、成田空港開港以来、空港就業者の居住地としての役割を果している。今後、さらに「人に支持」されるためには、一歩踏み込んだセールスポイントを打ち出すことが必要である。

本市の最大の特質である「緑多く、自然豊か」であるという点に加え、「商業地、学校などに比較的近い」など日常生活をするうえで一定の利便性を確保している点を最大限に活かした提案として、自然のなかで、ゆっくり子育てやゆとりある生活「半(han)田舎暮らし」を提案するものである。この提案の背景には、昨今各種メディアで盛んに取り上げられる「スローライフ」や「エコライフ」など、いわゆる「田舎暮らし」といわれる自然回帰を謳う住まいの選択肢が社会的にも認知度を高めつつあるなかで、一方では通勤や通学などの事情で、なかなか踏み込めないことが挙げられている。そこで、「田舎暮らし」と「都会暮らし」との中間を志向する「半(han)田舎暮らし」,「han」の「h」は「healthy(健康的な)」,「a」は「安全・安心」,「n」は「nature(自然)」を表す、生活スタイルを提案する。

本市の「半(han)田舎暮らし」では、社会的利便性を確保しながら、一步外に出れば緑にあふれ、自然とふれ合う生活ができ、さらに住宅と家庭菜園などと合せた多様なモデルを提供していくこともできる。勤務地が至近距離にある成田空港関連企業の就業者にとっては、「職住一体」を提案するものである。

さらに、南部地域では新規に農業を始める希望者を積極的に受け入れすることにより、地域の活性化と耕作放棄地の解消にも結びつくもので、この場合営農指導と新規販路の開拓などのサポートプログラムの創設なども有効と考える。

(3) 「エアポート・ツーリストタウン」として

市内に観光客などを呼びこみ、地域の活性化を図ることが重要である。本市の場合は、観光資源がなく、特産であるすいかを中心とした富里スイカロードレースなどイベント型の集客のみであった。平成25年12月に「旧岩崎家末廣別邸」が国の登録有形文化財に登録され、今後は末広農場の歴史を基とし、他の関連する史跡などの文化財とストーリー仕立てで関連付けた展開も可能となった。そこで、成田空港周辺の観光スポットを一体的に回遊する魅力的なルートを構築して、成田空港のトランジェット客を含めた観光客の誘致を図るものである。